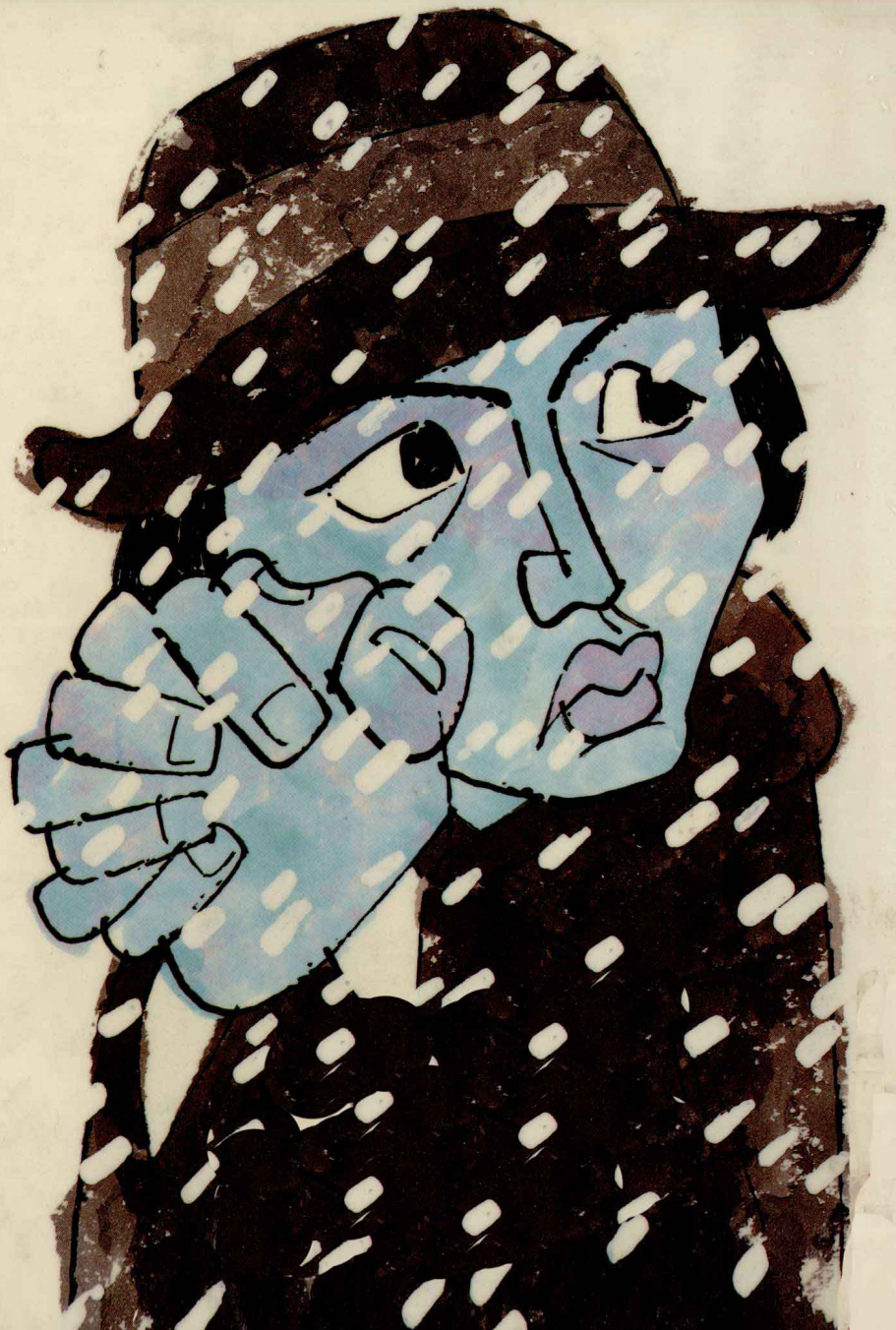
中原中也



新文芸読本

中原中也

©1991

初版印刷　一九九一年二月二〇日
初版発行　一九九一年二月二八日

発行者　清水　勝
発行所　株式会社　河出書房新社
〒151　東京都渋谷区千駄ケ谷二-三二-二
電話　東京　三四〇四-一二〇一（営業）
　　三四〇四-八六一一（編集）
振替　東京〇-一〇八〇二

印刷　株式会社享有堂印刷所
製本　和田製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
定価はカバー・帯に表示してあります
Printed in Japan
ISBN 4-309-70157-4

新文芸読本

中原中也

河出書房新社

新文芸読本◉中原中也◉目次

1 幾時代がありまして 5

★中也の歌は、低音で、しかしはっきりと問いかけて来る
中原中也小伝——吉田凞生 6

2 これが私の故里だ 15

★諸君はすでにお気づきであろう。中也教徒が、ひとりの敵をもつことを
中也教案内——池内紀 16

★「ぼくが死んでも、おかあちゃんはあんなに泣こうかね」
亜郎の死——中原フク述 村上護編 23

★兄の心臓の強さに敬服はしたが恥かしくてやりきれなかった
サン・グラス——中原思郎 30

★人数を数えるときも自分を数えないので一人すくない
不在の人——吉田知子 35

3 いかに泰子いまこそは 41

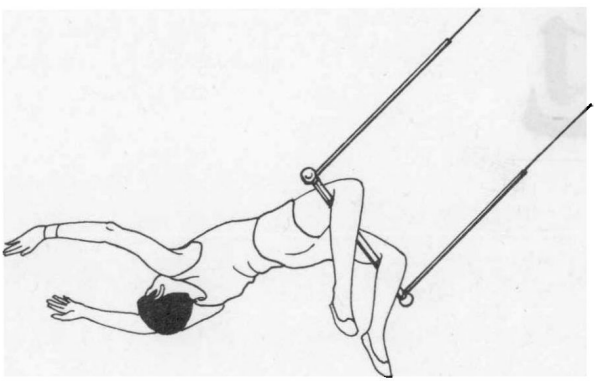
★富永が死んだ翌日二晩寝なかったとダダさんが来た
ダダさんの思い出——正岡忠三郎 42

★恨みも罪も、雪のように消えてしまった
春風帝地——高橋新吉 45

★「うちへ来てみたっていいよ」と言われて行ったんですけどね
(対談)中也・在りし日の夢——長谷川泰子 秋山駿 51

4 この一本の手綱をはなさず 69

三二情報
父と森鷗外●6
愛称は"ちゅうちゃん"●8
犀川を恐れる●10
医者の子としての詩人●12
泳げなかった中也●24



★ベッドの側に、中原の愛人が腰かけていた
兄小林秀雄(抄)——高見沢潤子 70

★私は自分の曲をひき、彼は自分の詩を朗読して聞かせてくれた
中也に始めて会った日のこと——諸井三郎 74

★書いた詩が同時代的に音楽に出遭うことなどめったにない
中原中也の詩を作曲した人々——相沢啓三 77

★彼の、人との衝突は謂わば彼の不羈なる感性と……
昭和三年秋から五年五月三日——安原喜弘 83

★かれの心象の景観は四季のように経めぐってゆく
「春の日の夕暮」——吉本隆明 90

5 汚れっちまった悲しみに 97

★ぼくは中原を読んでいると、ちょっとうろたえてしまう
いいかえのきかない詩と生 ◆詩の根本に触れた詩人——谷川俊太郎 98

★中也の作品には、我々の生理を奇妙に挑発するものがある
中原中也の断片——別役実 104

★中也の詩を覚えて外を歩いていると、心が軽くなる
わたしの中也さん——吉増剛造 109

★何か、大きな劇の終幕をはやしたてる合唱隊の唄なのだ
悪魔の伯父さん——岡井隆 118

★それは中原が自分で背負って帰らなければならない、苦しい負担だった
私の接した中原中也——青山二郎 126

6 私の上に降る雪は 133

★「高森、まあ飲み直そう。酔って歌でも歌おう」
過ぎし夏の日の事ども——高森文夫 134

★肉感性と聖性の相克というか邂逅というか……
「生」と「聖」 ◆中也における貧治問題——入沢康夫 137

中也と関東大震災●26
中也のおしゃれ●27
毎夜十数キロの驚くべき散歩●28
不敵で不吉な初印象●30
宮沢賢治への共感●32
歌われてレコードにもなった詩●42
好きな音楽はバッハの受難曲●46
理想とした詩人ヴェルレーヌ●48
知識はすべて、悪魔であるぞ●70
泰子へのこだわり●72
愚者の集団—『白痴群』●74
警察を恐れる●75
刻んだ葱とみつばのおひたし●76
青年とオモチャ●77
フランスへ行きたしと思えども●80
太宰治への凄絶なからみ●82
ビール壜でなぐられた中村光夫●90
難産だった処女詩集●92
ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん●93
中也ファンだった伊東静雄●94
トタンがセンベイ食べて●96
ベルグソンとニーチェ●104
懐中に短刀を入れた子供●105
小林秀雄への凄じい恨み●106
不採用に終ったNHKへの就職●108

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

★「山羊の歌」の遅刊は詩人みずからが意志的に仕掛けた困難であった
『山羊の歌』をめぐって——堀内達夫 142
★「小林秀雄の紹介なんだが……」と低い声で呟くように……
『山羊の歌』のこと——野々上慶一 146

ハイ、ではみなさん、ハイ、ご一緒に 163

★中也という詩人は、いわば"海千山千"だったのではなかろうか?
一見の稚拙? ◆中原中也寸感——吉原幸子 164
★「ペロペロの神様は……」とうたいながら愛児と遊ぶ彼の姿が……
ペロペロの神様——野田真吉 170
★中也は——人生へのお辞儀を始めたのである
知れざる炎(抄)——秋山駿 174
★精神分裂病と書かれているが、この診断は疑問に思われてくる
中原中也の診断 ◆病床日誌を読んで——加賀乙彦 185
★缶に耳を近づけ、じっとその音を聞いてみると、せつない
中原中也が聞いた音——佐々木幹郎 189

作品 195
山羊の歌(抄) 196
在りし日の歌(抄) 201
未刊詩篇(抄) 207
我が生活 211

イラストマップ
幼少年期・山口マップ 68

年譜 216

ブック・ガイド 220

幼年への回帰願望●109
病に抵抗した創造力●110
修業者としての中也●112
季節が流れる、城塞が見える●114
生涯の鵬翼り—肝やき息子●116
日本一の「空」の詩人●134
永眠は自分が書いた文字の下●136
立原道造の別離宣言●186
戦時下の青春と中也の詩●187
七〇年安保闘争と中也●188

カバーイラスト・装幀＝山藤章二　見返し・本文紙イラスト＝吉田光彦
表紙・本文紙フォーマット＝渋川育由
編集協力＝青木健・沢正宏・藤本寿彦・中原美枝子

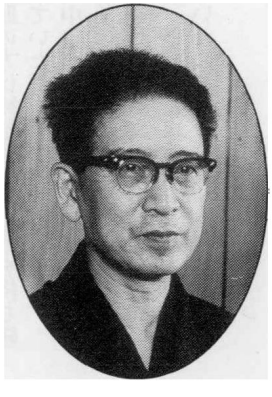
1

幾時代かがありまして

（「サーカス」）

「・宇宙の機構悉皆了知。
・一生存人としての正義満潮。
・美しき限りの鬱憂の情。
以上三項の化合物として、
中原中也は生息します。」
一九二七（昭和二）年、二十歳の日記「四月二十七日」の頁に、中原中也はこう書いている。
一見自信にあふれているような口吻だが、失恋からの自己回復へ向って、中也は、必死で自身をふるい立たせたのであった。

中原中也（一九〇七―三七）と
同年、前後年に生まれた文学者
伊藤整（一九〇五―六九）↘
坂口安吾（一九〇六―五五）
高見順（一九〇七―六五）↓
井上靖（一九〇七―九一）↙
中島敦（一九〇九―四二）
太宰治（一九〇九―四八）
大岡昇平（一九〇九―八八）



中原中也小伝

吉田凞生

吉田凞生（よしだひろお）
近代日本文学研究者。一九三〇年広島県生まれ。東京大学国文科卒。『小林秀雄』『書誌小林秀雄』（堀内達夫との共編）。『中原中也全集』（大岡昇平、中村稔と共編纂、全五巻別巻一巻、67―71年、角川書店）『評伝中原中也』など。

中原中也は明治四十年（一九〇七）四月二十九日、山口市湯田温泉に生まれ、昭和十二年（一九三七）十月二十二日、鎌倉の病院で死んだ。わずか三十年の生涯であった。

その短い生にふさわしく、彼が遺した詩集は『山羊の歌』（昭和九年）と『在りし日の歌』（昭和十三年）の二冊に過ぎない。だが死後五十年あまりが過ぎた今日でも、彼の詩に心を動かされ、彼の詩を愛する人は多い。

中也が率直に自己の心情を読者に訴えかけているからである。彼は人間関係における自己喪失感、子供のような目が見た幻想的な光景、現実世界からはみだした人間のお道化とアイロニー[*1]と批評、神に救いを求める宗教感覚等々を歌う。そして中也の歌は、現代の私たちに、低声で、しかしはっきりと問いかけて来る。――氾濫する「物」と「情報」への対応に多忙な君たちは、本当の自己の生というものを見失っているのではない

●父と森鷗外

中也の父謙助は、明治二九年に、東京医学専門学校済生学舎で三カ月の実地試験を受け、その時施行された医師資格試験に合格して医者になった人である。同三七年には一等軍医（大尉）に任ぜられている。

謙助が医師免許取得後の明治三一年、二二歳で陸軍軍医学校に入学したとき、校長は三六歳の森鷗外であった。以来、謙助は鷗外をもっとも尊敬する人物とした。

広島衛戍病院付で広島に転居したとき、謙助は広島に来た鷗外を駅に迎え、旅館までおともしている。鷗外の側に記述がないので、彼が謙助をどのように考えていたか不明だが、謙助の方は終始親しい感情を持ち続けていた。

中也が後年、友人たちに、自分の名前は鷗外がつけたのだと、故意に嘘をついていたのは、両親から聞いた、既述したような話がもとになっていたのである。

か、と。

中也は早熟な少年であった。彼が短歌を作り、山口県の「防長新聞」に投稿し入選したのは小学校六年生の時である。県立山口中学三年の年には、友人と私家版の歌集『末黒野』を刊行し、好評を博している。総じて彼の短歌には石川啄木[*2]、若山牧水[*3]らの影響が見て取れるが、「寂し」という欠如の主題の展開の仕方には中也独特のものがある。

中也は小学校一年の時に幼い弟[*4]を病気で失っているが、その時この亡弟を歌ったのが詩作の初めである、と後年書き記している。中也はこの弟が死んで一年あまりは毎日のように墓参りに行っていたという。これは小学校一、二年生の行動としては注目しておいていい。愛する者との別れを人一倍「寂し」と感じる中也の感性は生来のものであり、それは彼の詩の主題を決めている。

もう一つ、彼の短歌の中には幼時追憶というモチーフ[*5]がある。中学二、三年の少年が、失われた幼時、母なる存在に保護されていた幼時を懐かしんでいるのは珍しい。彼の第二詩集が『在りし日の歌』と題されたのは偶然ではないだろう。「在りし日」とは、中也にとっては「幼かりし日」と同じ意味である。

しかし『末黒野』の少年歌人も学業の方は芳しくなく、中学三年で落第する。両親の失望ははなはだしかった。両親は長男の中也が、大学を出てエリートコースを進むことを望んでいたからである。山口では親を心配させる息子のことを「肝やき息子」と言うが、この落第は、中也が「肝やき息子」としての本格的な（？）道を歩き始めたしるしであった。

中也当人と家族で事後処置が話し合われ、結局京都の立命館中学に転校した。落第生として山口中学にとどまることは、中也にも両親にも好ましいことではなかったのであ

若い頃の父謙助と母フク

＊1　irony　皮肉。あてこすり。

＊2　1886－1912年。歌人、詩人。岩手県生まれ。代表作に『『一握の砂』（東海の小島の磯の白砂に／われ泣きぬれて／蟹とたはむる）』。

＊3　1885－1928年。歌人。宮崎県生まれ。「幾山河こえさりゆかば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく」他の旅と酒の詠歌が多数ある。

＊4　弟・亜郎（あろう）のこと。大正四年一月九日、脳膜炎のため四歳余で夭折。

＊5　motif　作品によって表わそうとする主題。

る。中也の父謙助は医者であり、中也の祖父が開業した中原医院を継いでいた。湯田温泉のような狭い地域社会では、医者は名士の部類に属する（事実、後に町会議員となっている）。そんな家の子が落第などしては、親も本人も格好がつかない。

ついでに先回りして言っておけば、中也の最終学歴は東京外国語学校（現在の東京外国語大学）専修科（夜間部）仏語部修了である。そして中也は一度も就職せず、詩人であることを天職であると考えていた。独身の時はもとより、結婚しても家からの仕送りで暮らしていた。幸い中原家には男の子が多かったから、中也は長男であっても医業を継がずにすんだのだった。

大正十二年（一九二三）、京都に出た中也はもう短歌は作らない。彼が書き始めるのはダダイズム[*6]の詩である。第一次大戦中にヨーロッパで起こったこの破壊的な芸術運動は、すでに日本にも伝えられ、高橋新吉[*7]の『ダダイスト新吉の詩』という詩集が刊行されていた。中也が影響を受けたのはこの詩集である。つまり少年中也は前衛的な詩人の卵として出発したのであり、ダダ的な詩想は一生彼を離れない。

しかし中也が直接高橋と交友関係を結ぶのは、もっと後のことである。京都で中也が得た最初の詩友は、富永太郎[*8]だった。当時富永は失恋の痛みに耐えながらボードレール[*9]に傾倒し、自己のあり方を模索していた。東京人だったが、大正十三年、京都に「遁走」して来ていて、中也と知り合ったのである。中也は富永から多くのものを学んだが、富永の内面を想像し理解することはできなかった。

ところで、中也は異性関係でも早熟ぶりを発揮して、京都で三歳年上の女優志望の女性、長谷川泰子[*10]と同棲している。もちろん両親には内密で。だがこの関係はあまり安定したものではなかった。中也は詩ができると泰子に読んで聞かせた。そして泰子も中也の詩には心を動かされたのだが、性的関係では自分が惨めに感じられたと泰子は言って

●愛称は〝ちゅうちゃん〟

中也が生まれたとき、父謙助は陸軍軍医として旅順にいたが、すでに男なら「中也」と命名するようにと妻フクに手紙で指定してきていた。

フクは読み方がわからないので、〝なかちゃん〟よりもよびやすい〝ちゅうちゃん〟でよびはじめた。この愛称が中也（ちゅうや）という名前を決定したのである（たとえば、歌人の岡井隆などは初めはナカヤと発音していたという）。ただし、八歳までは柏村中也であった。

中也は自分の名前は森鷗外（父が私淑）がつけたと他人に話しているが、命名は父の上官で軍医の中村六也（後年は緑野）に由来すると、フクは述べている。

これに対し、大岡昇平は、「中庸」巻の一にある「中庸（ちゅうなるよう）也」から中村が採ったと推定している。他方、深草獅子郎は、父が当時教養人の必読書として読んだであろう『碧厳録』から採った（「中也（あたれり）」とある）としている。

自分の名前に対し中也本人は、一

いる。後に泰子が小林秀雄[*11]のもとに走る伏線は、すでに敷かれていたのである。

大正十四年（一九二五）、中也は泰子とともに上京した。大学受験が表向きの理由であったが、中也は受験にはあまり熱意は示していない。家には予備校に通うという名目で、東京生活を始めることにした。今も昔も、文化の中心としての東京の力は強い。詩人として名を挙げるためには、中也も東京の住人となる必要があったのだ。

富永太郎の紹介で小林秀雄との交友が始まる。当時小林は東大のフランス文学科に入学したところだった。小説を書いていたが、ランボー[*12]の詩にのめり込んでいた。小林は中也について、嫌悪と魅力とを同時に感じたと言っている。自分とは正反対の「虚無」を所有していると感じたとも言っている。

中也にとっての不幸は、泰子が小林に惹かれ、小林と同棲してしまったことだった。大正十四年十一月のことである。小林との新居へ移る泰子に、中也は割れ物の包みを持ってついて行った。そして神から与えられた「自己統一の平和」が失われた、と感じた。中也の考えでは、詩人とは、身の回りのことだけを素材として、神を感覚的に歌う役割を持って生まれた人間なのであった。

しかしこの事件の約半年後、中也は初期の代表作の一つである「朝の歌」を書く。事件は中也に深い傷を与えたが、詩作を中断させるには至らなかった。昭和二年か三年、実現はしなかったが、中也は処女詩集の刊行を計画している。それは『山羊の歌』の「初期詩篇」に痕跡をとどめている。

昭和三年（一九二八）五月、小林と泰子の関係は崩壊した。小林は単身関西へ脱出する。原因は泰子の神経症であるが、真相はもっと深刻だったようだ。当時、小林は妹に宛てて、泰子は心情というものがまったく欠如している女だ、と書き送っている。

＊11　1902―83年。評論家。東京生まれ。府立一中の同級生には木村庄三郎、正岡忠三郎、一級上には富永太郎らがいた。一高から東大仏文科に進む。同級に今日出海、中島健蔵、三好達治、淀野隆三など。　＊12　Arthur Rimbaud 1854―91年。フランスの象徴派詩人。代表作『地獄の季節』。大正一五年、小林は「人生研断家アルチュル・ランボオ」を発表。

五歳のときには「智宇哉」と『防長新聞』の短歌欄に署名して、宇宙を認識する者の意味を見出している。だが、二一歳のときには、姓と名とにある中の字には女陰の意味があるのでろくな名前ではないと、中谷孝雄に話している。

＊6　dadaisme トリスタン＝ツァラ等が提唱した社会的、芸術的伝統を否定した芸術運動で、第一次大戦の西欧世界を席巻。

＊7　1901―87年。詩人。愛媛県生まれ。『ダダイスト新吉の詩』は辻潤の編集で、大正一二年二月刊。中也は昭和二年一〇月、東京・牛込の吉春館に詩人を訪ねている。

＊8　1901―25年。詩人。東京生まれ。同人誌「山繭」に象徴詩風の端正な作品を発表。

＊9　Charles Pierre Baudelaire 1821―67年。フランスの詩人。批評家。代表作『悪の華』。

＊10　51頁の略歴を参照。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

しかしそういう泰子が、中也の目には「私の聖母」と映ったのだから、異性関係というものは分からない。中也にしてみれば、泰子は自分のところへ帰ってくるべきなのだが、泰子の方は承知しない。それどころか、山川幸世[13]という左翼の演劇青年の子供を産んでしまう。中也はその子に名を付けてやり、泰子が映画女優として仕事に出る時は、お守りをしてやったりする。子供に対する特別な感情の現れである。

この間、中也は河上徹太郎[14]、大岡昇平[15]、安原喜弘[16]、内海誓一郎[17]らと同人雑誌「白痴群[18]」を創刊する。昭和四年四月のことである。誌名は「俗物になれぬバカの集まり」という意味である。

初めて自分の詩を世に問う舞台を得た中也は、活発に詩作し、毎号作品を載せた。その中には「寒い夜の自我像」のように詩人としての使命感を示す詩もあれば、「時こそ今は……」のように泰子に対する再求愛のメッセージを含んだ詩もある。人間には日常の利害打算よりもっと価値のある、普遍的な幸福というものがあり、愛というものがある、というのが詩人中也の信念だった。

しかし「白痴群」は一年で廃刊となった。原稿の集まりが悪くなったためである。そして廃刊を機に、中也の詩作も停滞し始める。フランス行きの手段として外務書記生の試験を受けることを考え、東京外語に通い始めたりしている。小林秀雄が新進批評家として活躍し始めたのと対照的である。昭和六年、弟恰三が病没したことも中也には衝撃だった。死者は清純で、生き残った自分は図々しい、という自責の念が中也を悩ます。『山羊の歌』の最後の二篇、「憔悴」「いのちの声」には、生命の停滞感とそこから脱出したいという願望が見える。

中也がそのために選んだのは、詩集を出版することだった。昭和七年（一九三二）、中也は『山羊の歌』を編集し、家から三百円を引き出して、自費刊行を企てる。だが資

●犀川を恐れる

室生犀星は、「四季」派の会合に一回だけ出席した中也をみて、「中原が部屋にはいってきたとたんにピカッと光るアイクチかなんかが部屋のなかに投げ込まれたような気持ちがした」といったらしい（丸山薫による）。

実は、一八歳違うこの二人の詩人は、二十数年前の大正元年と二年とには、同じ金沢市内に暮らしていたのだが、もちろん二人ともこのことに気がついてはいなかった。

この年、犀星は二度目の帰郷（千日町雨宝院）をし、中也は父の転勤に伴う転居（野田寺町松月寺前）をしていたのである。二人の住まいの距離は二〇〇メートルほどで近かった。

終生、犀川を愛した犀星は、この頃孤独の心象である「青き魚」の詩的イメージにこだわっていたが、幼稚園児の中也は雪解けの犀川を怖がり、生涯その水音をはっきりと記憶していた。

「犀川の冬の流れを清二郎（注・小

金が続かず、本文を印刷しただけで中断せざるを得なくなった。それも一つの引き金となったのか、年末にはノイローゼ状態となった。強迫観念に襲われ、幻聴があったという。

しかし年が明けて昭和八年になると、精神状態は徐々に平衡を取り戻したらしい。この年三月、東京外語を修了。秋、遠縁に当る上野孝子[*19]と見合いをし、十二月に郷里山口で結婚した。中也は珍しく素直だったと伝えられている。新居は四谷区（現在の新宿区）の花園アパート[*20]で、同じアパートに小林秀雄との共通の友人、青山二郎[*21]がいた。同じ十二月、『ランボオ詩集《学校時代の詩》』を三笠書房より刊行した。中也はまずランボーの翻訳で認められたのである。

結婚によって生活は安定した。翌九年（一九三四）には長男文也（ふみや）も生まれた。しかし詩は生活を模倣しない。昭和九年の詩には、しばしば狂気、道化、死などのイメージが現れている。現実世界になじめない感覚、現実からずれた生の感じが繰り返し語られるのである。翌十年の「この小児」など、子供を歌った詩にも不吉な影がさしている。中也は自己の死、愛児の死を予感していたのだろうか。

昭和九年十二月、ようやく『山羊の歌』が文圃堂（ぶんぽどう）から刊行され、おおむね好評だった。時代は満州事変[*22]以後、日中戦争[*23]以前の相対的安定期で、プロレタリア詩[*24]もモダニズム詩も後退し、「四季[*25]」を主流とする抒情詩の時代に入りつつあった。中也もさっそく同人

＊15　1908―88年。小説家。東京生まれ。代表作『俘虜記』。　＊16　83頁の執筆者略歴を参照。　＊17　1902年生まれ。「白痴群」、「スルヤ」の同人。中也の詩「帰郷」「失せし希望」を作曲。　＊18　一九二九（昭和四）年四月創刊、三〇年四月終刊。同人は中也、河上徹太郎、大岡昇平、安原喜弘、古谷綱武、阿部六郎、富永次郎、内海誓一郎、村井康男。　＊19　中原五族の一つ下殿中原家一二代当主中原岩三郎の兄上野富一の孫。夫・中也より六歳年下で、のちに野村恭雄と再婚。　＊20　四谷区花園町九五番地（現・新宿区新宿一丁目）に建っていた。多数の文壇人が雑居。　＊21　126頁の執筆者略歴を参照。　＊22　一九三一（昭和六）年九月一八日、中国軍が柳条湖の満鉄線を爆破したとして、関東軍が軍事介入した事件。中也は「支那といふのは、吊鐘に這入つてゐる蛇のやうなもの」と記している。　＊23　一九三一年九月の柳条湖事件から、一九四五（昭和二〇）年終戦までの十五年にわたる中国侵略戦争。　＊24　大正末以降の左翼文学運動とともに提唱された詩。中野重治・萩原恭次郎等が有力な担い手となった。　＊25　堀辰雄を中心とする詩雑誌。一九三三（昭和八）年五月創刊、四四（昭和十九）年六月終刊。

説家島田清次郎のこと）も泣いてきゝしか僕の如くに」という短歌からもわかるように、中也にとって犀川は暗い思い出になっている。詩ではやはり、犀星がそうであったように、中也も故郷の川である水無川（みなしがわ）（吉敷川（よしきがわ）の一部）をうたうことになる。

＊13　女性の同人誌「火の鳥」に参加した山川柳子の息子で、築地小劇場で演出を担当。中也が名付親になった子とは茂樹のこと。

＊14　1902―80年。文芸・音楽評論家。長崎市生まれ。

として迎えられた。またその一方で草野心平ら[26]と「歴程[27]」を創刊し、さらに小林秀雄が編集責任者となった「文学界[28]」には、自由に詩を発表することができるようになった。遅れて来た昭和初年代の詩人、そして昭和十年代の新進詩人としての中也の地位は、このような形で定まったと言ってよい。

しかしこのように詩壇での評価は確実に上昇して行ったにもかかわらず、中也はかえって内向的な姿勢を堅持するようになって行った。それまでの中也は街歩きを日課とし、その時に目に入る風景や、友人たちとの対話を詩作の原動力としていた。だが詩壇に出てからは独居を愛し、読書とフランス語の勉強とランボーの翻訳を日課とするようになる。この頃の日記から判断すると、何か自分が壁に突き当っているという感覚と、自分にとって決定的な時期が訪れているという自覚があったらしい。

中也はこの時期、「新しい役目[29]」が神から与えられることを切望している。だが、壁に突き当った中也が選んだ。「新しい役目」は、神に奉仕することではなかった。それは自己の「名辞以前の世界[30]」――言葉が日常の「もの」となる前の世界に入って行き、それを詩という言葉で表現することだった。

身の回りから素材を得るという中也の詩法からすれば、中也が「名辞以前の世界」として、「在りし日」という子供の世界に向かうのは自然だったとも言える。昭和十一年（一九三六）は、「一つのメルヘン」「言葉なき歌」「曇天」など、中也の晩年の佳作が集中して書かれた年であるが、これらの詩は、子供の目で見られ、子供の言葉で歌われた作品なのである。

しかしこれらは冒険と言えば言える詩法である。日常の言葉と詩の言葉はそんなに画然と分かれているわけではないからだ。日常の言葉を否定することは、常に詩の言葉を否定する危険性を含んでいる。『山羊の歌』の時の中也は、強い対人関係の意識と破壊

●医者の子としての詩人

佐藤春夫や萩原朔太郎がそうであったように、中也もまた、医者の子としての詩人であった。医師資格試験に二〇歳の若さで合格した父謙助が、軍医を退き自宅で湯田医院を開業したのは、中也が一〇歳のときである。

父は一時も休まず働く人で、貧しい癌患者には無料でX線や、山口県下で最初に導入したラジウムをかけたりして、医院としての評判もよかった。

逆にいえばこのことは、家業を継がなかった中也の内面に、家を罪悪視する意識を育ちにくくさせたともいえる。

その意味では、中也が日記（昭9）で、貧乏な患者だとわかると、死にかかっていても見捨てるタイプの医者にふれ、それは「間違ってゐる」としているのは面白い。

また、中也が医者の子であったことは、自分の痛風（ギヒ）の治療法を知っていたことや、長谷川泰子の子供の種痘に対する指示内容などからうかが

的な言葉でこの冒険を遂行したが、『在りし日の歌』ではきわどい場所に立っていたのである。

ところで、晩年の中也の最大の不幸は、これらの佳作を書きながら、昭和十一年十一月に愛児文也を失ったことである。死因は小児結核であった。中也は始めは胃が悪いという程度にしか考えていなかったのだが、容体が急変した。徹夜の看護も空しかった。葬儀の時、中也は文也の遺体を抱いていて、なかなか棺に入れさせなかったという。四十九日の間、毎日僧侶を呼んで読経してもらった。中也は文也を愛していて、文也が詩人になればよいと思っていた。中也にとって文也は自己の「在りし日」の現前であり、文字通りの分身であった。だから文也の死は中也の精神的な死につながったのである。

文也を失った中也には、葬式についての近所の人の悪口や、巡査の足音が幻聴として聞こえるようになったらしい。ラジオに向かって御辞儀をすることもあったという。心配した孝子夫人が母フクを呼び、フクは中也にはそれと言わないで、昭和十二年（一九三七）の新春早々、千葉市にある神経科の病院、中村古峡療養所[*31]に入院させた。昭和五十四年、当時のカルテ[*32]が発見されたが、これを見た加賀乙彦は、中也の病気はノイローゼ圏のものであると診断している。二月中旬に退院した。

退院後、文也の死んだ家にいるのは辛いという理由で、鎌倉に転居する。鎌倉には小林秀雄、今日出海[*33]、大岡昇平ら旧友が住んでいた。教会に通い、仏教書なども読んでいる。

しかし鎌倉の生活も、中也の心身の疲労を回復させることはできなかった。夏には帰郷の決意を固めている。弟たちが家を出て就職したり入学したりするので、実家には母だけになるという事情もあったが、やはり中也自身が故郷でくつろいで生活し、勉強し、再出発を図りたかったのである。中也は関東地方の自然が肉感に乏しい、と友人に宛てうことができよう。

ところで、同じ医者の子とはいえ、朔太郎は詩人としての中也を好意をもって評価し、春夫は敬遠した。

＊26　1903―88年。詩人。福島県生まれ。代表作『第百階級』。

＊27　一九三五（昭和一〇）年創刊の詩雑誌。

＊28　一九三三（昭和八）年一〇月創刊、三四年二月までの五冊を文化公論から発行。同年六月から三六年六月まで文圖堂から発行。小林は三五年一月から三六年六月まで編集にあたった。同誌は三六年七月から文藝春秋発行、現在に至る。

＊29　「日記」一九三五（昭和一〇）年一〇月六日の条に書かれた言葉。「すべて書は読まれた。私の新しい役目が始まることを（それがどんな役目であれ）、切望します、神様」。

＊30　「名辞以前」とは中也の詩論の根底にある思考の一つで、直観、絶対、美を意味する。その直観によって捉えられた世界のこと。

＊31　一九二九（昭和四）年、千葉市千葉寺に設立。根本的自覚療法と訓練療法を医療方針とした。

＊32　Karte（独）診療の記録をするカード。186頁の「中原中也の診断」を参照。

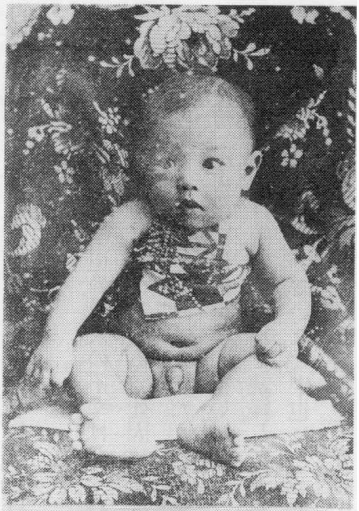
＊33　こん・ひでみ 1903―84年。直木賞作家。北海道生まれ。代表作『天皇の帽子』。今東光は実兄。

て書いているが、肉感が欠けていたのは自然だけではなかったろう。

八月、『ランボオ詩集』の刊行を野田書房に申し入れた。急いでいる様子だったという。九月下旬、『在りし日の歌』の原稿を清書し、小林秀雄に託した。

だが結局この帰郷計画は実現しなかった。中也自身が十月五日に結核性脳膜炎を発病、二十二日に死んだからである。そしてこれが中也を襲った最後の、そして最大の不幸であった。遺骨は郷里の吉敷にある「中原家累代之墓」に葬られている。墓碑の文字は大正十年（一九二一）、中也が中学二年生の時に書いたものである。『在りし日の歌』は中也が没した半年後の昭和十三年四月、創元社から刊行された。

（「鳩よ！」一九九〇年五月号　マガジンハウス）



生後4カ月の中也。

一九〇七（明治40）年一一月、生後半年の中也は母と、父が軍医として赴任していた中国に渡る。旅順の北北東40キロにある柳樹屯の写真館で、〇八年八月、中也は1歳4カ月。

金沢時代の一家。前列左から中也、弟亜郎（通称あろう）一九一〇年生）、祖母スヱ（母の実母）、母フク、後列左から父謙助、別当が抱いているのは弟恰三。父は中国から広島、金沢に転任して、一家は一二年から一四年まで金沢に住んだ。

2

これが私の故里だ（『帰郷』）

「大正四年の初め頃だったか終頃であったか兎も角も寒い朝、その年の正月に亡くなった弟を歌ったのが抑々（そもそも）の最初である。」

評論「我が詩観」末尾に付した「詩的履歴書」の冒頭に、中也は、自身の詩的出発として、弟亜郎の死を挙げている。愛する幼なき者の死によって始まった中也の詩的生活は、愛児文也の死によって最後の詩集『在りし日の歌』として終ることになるのだ。

湛（ふし）野川。湯田温泉駅をはさんで中也の生家の向こう側を流れている。この川岸は中也の遊び場だった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com